

「清明時節雨紛紛、路上行人欲斷魂」。これは唐代の詩人杜牧の有名な句である。「清明の時節雨紛紛たり、路上の行人魂を断たんと欲す」と読み、清明の季節になると、しきりに雨が降り、人々の故人をしのぶ気持ちを一いつそう誘い出すという意味である。

清明は古くから伝わる中国の伝統的な行事で、清明節にまつわるある伝説がある。中国の春秋時代に晋の国の若君である重耳は国外に逃亡していた。途中、空腹や疲労の果てに倒れた。随臣の介子推は自分の足の肉を切り落とし、肉汁を作って若君に食べさせ、その命を助けたという。十九年後、重耳が晋の君主・晋文公になったのちに、当時、一緒に逃亡生活を伴った人々を厚く褒賞したが、介子推のことだけを忘れてしまった。介子推は何にも言わずに老母をつれ、ひそかに山に隠居した。晋文公はそのことを聞いて、恥ずかしく思い自ら介子推のところを尋ねた。しかし、莫大な山に二人を探するのは大変困難であった。そこで、晋文公は人の進言を聞き入れ、山を焼き払うことにした。介子推は親孝行な人なので、老母の命を守るために必ず出てくると信じたのだ。山の最後の樹木が

清明節



久場 未雲

燃え尽きたところ、介子推は老母を背負って焼き焦げた柳の木の下に座ったままに亡くなった姿で現れた。木のうろに「割肉奉君尽丹心、但願主公常清明（肉を切り君主に真心をささげ、君主が常に清明であると願う）」という遺書が残されていた。ここでいう「清明」とは、政治を明朗にするということである。その後、介子推を記念するために、その日を「寒食節」（火を付けずに冷たい食事をする）と定め、翌日の四月五日を清明節と決めたという。以来、その習慣が受け継がれて現在の先祖を祀る清明節に変わっていた。

中国の清明節は、沖繩の清明とほとんど変わりが無い。お墓を掃除し、ごちそうを供えるほか、柳の木を枝を墓に挿す習慣もあったようだ。それは、晋文公が介子推の墓に参拝した時、焼けた柳の木に若葉が茂っていて、それを「清明柳」と命名したことに由来しているということだ。

今年の清明の日、初めて亡き母の前に手を合わせた。戦後五十年という歳月を中国大陸で生きた母、生前の母の思影を偲びながら世の中はいつまでも清明（よい政治が行われ、平和）であるように願った。

（会社代表）